



ひまわり通信

No.00714. 2025.4.24(木)

健康寿命から貢献寿命へ

「血液健康法」～病気の因を断つ～（第3弾）

昭和53年11月22日 初版発行著者 聖医 岡田一好

全身をボロボロにする対症療法

医学も、人体や病気の治療法といった自然界の生理、科学作用などを対象にしたものである以上、その考え方は、当然のことながら自然観、人間観といったものに支配されている。

東洋医学と西洋医学の差といったものがよくいわれるが、両者の差は、いわば自然観、人間観の差によるものといえる。

西洋では、「エベレストを征服した。」といういい方をよくするが、自然とは、その秘密をあばき、征服するための対象であり、人間と自然と対立し、それを支配する、自然と切り離されたものであるとみなす。

こうして自然を敵視し、人間という自然界の一部にすぎないものを、その全体から切り離して絶対視する西洋の考えかたは、医学にもはっきりと反映している。

西洋医学は病気を敵視し、症状だけに眼をうばわれ、対症療法に終始してしまうことが多い。

しかし、病気の症状というのは、単なる部分的、表面的な現象にすぎないから、それを消すだけでは根本的な治療にはならない。

一番簡単な例が歯痛であろう。

歯痛は多くの場合、虫歯からおこる。しかし、歯痛という症状にだけ気をとられ、鎮痛剤で痛みをおさえるという対症療法では、鎮痛剤がきれば、痛みはまたぶりかえし、そうしているうちに虫歯はどんどん悪くなり、痛みもひどくなるばかりである。歯痛の根本治療法は虫歯を治すことである。

これは誰もが知っている。

そして、これが西洋医学におけるせめてもの例外的な根本治療であろう。

だが、他の病気では、多くの人びとはこうした根本療法をなかなかとろうとしない。だから、治療に長びき、副作用に悩まされる。

とりわけ、成人病などの慢性病にはこの傾向が強く、西洋医学は慢性病には効かないよと、よく悪口をいわれる。副作用もまた、西洋医学の、部分というもののだけにとらわれた考えかたの産物といえる。対症療法では、病気の症状だけを人体という全体から切り離し、ただヤミクモにそれだけを治そうとする。症状を敵視し、それを退治しようと、ガンの放射線療法や制ガン剤療法などのように、部分を毒で制そうとする。殺虫剤で害虫を退治するのと同じ発想である。

だが、人体というものは、頭の前から爪先までが密接なつながりをもっている有機的結合体である。そのため、対症療法に用いた薬の効きめは全身に及ぶことになる。

部分を毒で制そうとすれば、その毒は全身にも作用することになる。沼にライギョがでたからといって、毒薬を投げ込み、ライギョは退治できても、どじょうや、ザリガニや、フナや、コイなど、他の魚までまきぞえにして殺してしまうようなものである。

病気の症状だけを、毒をもって制そうと、対症療法を続けるかぎり、良く効く薬、つまり強い薬ほど、強い副作用をおこし、病気は治っても全身がボロボロという悲劇はいつまでもつづく…

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198